日本音楽集団
PRO MUSICA NIPPONIA

PRO MUSICA NIPPONIA

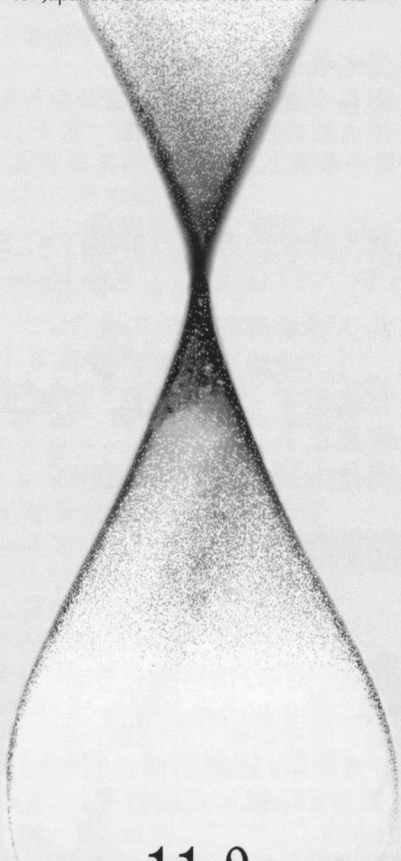
第169回定期演奏会
The 169th Regular Concert

クリティックス・プロジェクト・シリーズⅠ

上野 晃

現代邦楽の領域Ⅱ：保守（コンサーヴァティヴ）と改革（リフォメーション）

Critics Project Series Ueno Akira
Territory of contemporary music
for Japanese traditional instruments, No.2



2002年11月2日（土）
午後2時開演（1時30分開場）
場所：第一生命ホール

：主催：特定非営利活動法人日本音楽集団／NPOトリトン・アーツ・ネットワーク／第一生命ホール
：助成：平成14年度文化庁芸術団体重点支援事業

■日本音楽集団：http://www.promusica.or.jp/index.html http://www.wahoo-net.com/promusica/ E-mail office@promusica.or.jp
■トリトン・アーツ・ネットワーク：http://www.triton-arts.net

プログラム

一 古代舞曲によるパラフレーズ（1966年）三木稔作曲

MIKI Minoru : Paraphrase after Japanese ancient music

［笛］西川浩平　［尺八］Ⅰ米澤浩・元永拓　Ⅱ加藤秀和・阪口夕山
［三味線］簑田司郎　［琵琶］田原順子
［箏］Ⅰ熊沢栄利子・田村法子　Ⅱ桜井智永・三宅礼子
［十七絃］宮越圭子・丸岡映美　［打楽器］高橋明邦・望月太喜之丞
［指揮］田村拓男
［ソプラノ・ヴォーカリーゼ］佐竹由美（客演）

二 十人の邦楽器奏者のための音楽（1974年）甲斐説宗作曲

KAI Sesshu : Music for 10 players

［笛］西川浩平　［尺八］Ⅰ米澤浩　Ⅱ加藤秀和
［細棹三味線］山崎千鶴子　［太棹三味線］工藤哲子
［琵琶］首藤久美子
［箏］Ⅰ桜井智永　Ⅱ三宅礼子
［打楽器］若月宣宏・細谷一郎（助演）
［指揮］田村文生

三 新八千代獅子 藤永検校作曲：（1976年）畦地啓司、藤舎呂船、三木稔編曲

Fujinaga Kenngyo～Arr. By AZECHI Keiji, TOSYA Rosen & MIKI Minoru : Shin-yachiyojishi

［笛］西川浩平　［尺八］加藤秀和・阪口夕山
［胡弓］多々良香保里　［三味線］山崎千鶴子　［琵琶］首藤久美子
［箏］Ⅰ早川智子　Ⅱ宮越圭子・久本桂子・彦坂恵美
［十七絃］久東寿子・渡辺正子
［打楽器］高橋明邦・望月太喜之丞・若月宣宏

休憩

四 セレナード第二番（1998年）田村文生作曲

TAMURA Fumio : Serenade Ⅱ for ensemble

［［笙］三浦礼美（助演）　［篳篥］稲葉明徳　［尺八］米澤浩
［胡弓］多々良香保里　［三味線］工藤哲子　［二十絃箏］熊沢栄利子

五 雪舟讃Ⅰ（1998年）廣瀬量平作曲

HIROSE Ryohei : Homage to Sesshuu Ⅰ

［笛］西川浩平　［尺八］Ⅰ米澤浩　Ⅱ元永拓　Ⅲ加藤秀和
［琵琶］田原順子　［箏］Ⅰ熊沢栄利子　Ⅱ桜井智永　［十七絃］宮越圭子
［打楽器］高橋明邦・望月太喜之丞・若月宣宏・細谷一郎（助演）
［指揮］田村拓男

一、 古代舞曲によるパラフレーズ　三木稔作曲

1965年にNHKの委嘱で作曲に着手、翌66年完成して収録された《古代舞曲によるパラフレーズ》は、秋の日本音楽集団第4回定期演奏会にて、常任の横山千秋指揮でステージ初演。翌年の第5回定期演奏会では、秋山和慶の指揮で再演される。邦楽器のアンサンブルというのを超え、邦楽オーケストラとして新しいスタイルとテクニカルを指向、かつヴォカリーズを編入した30分近い大曲としても、当時大きな衝撃を与えた。国内国外で演奏回数きわめて多く、日本音楽集団の旗印大旆に相当する。

近世の抑圧的な制度のもとで、閉鎖的に発展完成されていった邦楽と日本の伝統楽器が失ったもの。楽器本来のフィーリングや機能や自由な精神を取り戻すには、日本民族の古代から、情緒も猛々しさも性(さが)も慟哭も、虚弱な現代に回帰されて来なければ—というのが作曲家の発想の理であった。

笛(篠笛・能管)／尺八I・II／三絃／琵琶／箏I・II／十七絃／打楽器I(締太鼓・桶胴・大太鼓・木鉦・編木)・II(笏拍子・鐃鈸・小鼓・木鉦)／ソプラノ、という編成だが、各パートが増員される場合も少なくない。五つの曲で構成され、I〈前奏曲〉の三絃独奏に尺八が迫り来る序奏の静かな空間で開ける。ほどなく囃子の浮き立つようなリズムに、続く曲の予感を伝える。II〈相聞(そうもん)〉は、万葉の恋歌。優しく大らかなソプラノのヴォカリーズに、能管・尺八が絃の合奏に乗って呼び交わし絡み合いながら、抒情が展がる。III〈田舞(たのまい)〉は、三味線の三拍子のリズムに先導され、スケルツォふうの囃子が繰り出される。民族芸能として各地に伝わる田楽のルーツ、豊作祈願の田植神事の舞。笛と三味線以外の奏者は、それぞれにチャッパ・複鈴・拍板・四つ竹などを手にして打ち囃す。IV〈誄歌(るいか)〉は、皇室の御葬(みはふり)の歌として代々うたわれて来たという。地を這うような低音尺八の重い流れに、他の一管の尺八が絡まり、さらに箏群の衝動的な慟哭が地底から突き上げるように起きる。V〈嬢歌(かがい)〉は、若い男女相集って交歓した古代の歌垣のシーン。遥かよりのさんざめきのような絃楽群のオスティナートで始まり、打楽器が加わっていよいよ昂揚し、ソプラノのヴォカリーズが狂おしく妖しい叫びをあげる。

二、 十人の邦楽器奏者のための音楽　甲斐説宗作曲

1974年の日本音楽集団創立十周年に当たる第22回定期演奏会で、甲斐説宗《十人の邦楽器奏者のための音楽》は初演された。当集団が外部の洋楽系の作曲家に新作委嘱を始めてより五年目、このシリーズの第十二作として生まれたが、それまでの現代邦楽の意匠や様式と著しく異なる、コンセプトの新しい邦楽器のアンサンブル曲として出現した。三十九歳で夭折する三年まえに書かれた、甲斐説宗の唯一の邦楽器のための作品だが、それは、彼の作風や音楽語法が一つの境地に達した重要期の所産でもあった。甲斐作品にほとんど初期から変わらず一貫しているのは、〈一性〉という独自な美学であり、それを追究するための方法論だった。器楽作品には《何人の——奏者のための音楽》という表記以外、一切イメージを喚起する具象的な曲名がない。限定された音のコンストラクションと動きから聴き手の心理や心象を導くために〈心操〉という用語も使った。

篠笛／尺八2／三絃2(細棹)・(太棹)／琵琶／箏I・II／打楽器I・II、という管絃ほぼ標準の編成ながら、三絃は高低二種を使い、琵琶や箏とともに、切り詰められた素材による点的な構図、篠笛や尺八による地の文様を、厳格に提示していくが、点と点を繋ぐのは、聴き手の自由な裁量と心のうちなるヴェクトルといえるかも知れない。

「——邦楽器の豊かな響きのなかから一つのあり方だけを選び出すことを考えました。聴く人の心に何げない響きの味が何げなく伝わるために、また聴く人がその響きの移ろいに自然に乗っていくために、素材をあらゆる面で節約して、一つの局面でとらえ、曲の流れを一つの線の上に乗せることが、どうしても必要だと思ったからです——」と作曲家は、初演のブックレットで語っている。

三、 新八千代獅子　日本音楽集団編曲

1976年の第34回定期演奏会にて初演された《新八千代獅子》は、野坂恵子構成による〈伝統音楽演奏会—地歌・箏曲その一〉というプログラムで、他にも《残月》をバリトンの原田茂生がうたい、《黒髪》をソプラノの砂原美智子がうたう、という大胆な実験的プロジェクトだった。

宝暦年間（1751—64）に、藤永検校によって三味線地歌の手事物になった《八千代獅子》は、初め尺八曲であったのを、胡弓の名手の政島検校が移曲し、さらに政島の師が三味線に移したといわれる。邦楽古典には〈獅子物〉と呼ばれる曲が、大層多い。が、長唄や常磐津などによる舞踊音楽は別にして、地歌・箏曲などでは、詞章が獅子とは関係なく、合の手が発展した器楽性に富むテクニカルな曲が少なくない。そうしたなかで比較的易しく、初級に属する《八千代獅子》だが、前歌—手事—後歌の形式を踏まえ、竹や松を詠み入れた祝の曲として、広く好まれて来た。これを従来の三曲合奏の形でなく、唄を省いて笛と尺八で替わらせ、三味線／胡弓／琵琶／箏Ⅰ・Ⅱ／十七絃／打楽器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの編成で合奏出来るように、三木稔／藤舎成敏（呂船）／畦地慶司（啓司）によって編曲、《新八千代獅子》というパラフレーズ作品に再生された。笛と打物が長唄囃子を形成し、原曲にはない獅子の舞踊を彷彿させる部分が挿入されている。

四、セレナード第二番　田村文生作曲

1998年第1回国立劇場作曲コンクールに応募、入選作品となって初演された田村文生《セレナード第2番》は、彼が初めて邦楽器のために書いた曲でもあるが、邦楽器のまったく新しい合奏形態とアンサンブルの難しさから、なかなか再演の機会が得られず、ようやく2001年の日本音楽集団第162回定期演奏会にて再演披露された。この作品を機に邦楽器のための作曲が漸次加わっていく田村文生は、日本音楽集団での指揮活動も次第に増していきつつあった。因みに彼は、1995年から二年間文化庁芸術家在外研修でイギリスから帰国後、作曲家グループ〈テンプス・ノヴム〉での作品発表とともに、東京芸術大学出身の若い演奏家たちで組織する現代音楽演奏団体〈アンサンブル・コンテンポラリα〉を率いて活動してきた。

楽器編成は、大きくはないけれども、笙／篳篥／尺八／胡弓／太棹三味線／二十絃箏、というやや異色な取り合わせの管絃六重奏。縦の垂直的関連にほとんど頼らない独立した音を、錯綜したカオス的な噪音でなく、横のリレーションがはっきりした秩序あるサウンドとして聴くことが出来るか—という命題が、邦楽器の非合理的な機能やファジーな性能では、一層距離を縮めるかも知れない、という期待になって底流する。独歩に個々の音の勝手な出会いとその強烈な反応からヴェクトルが生まれ、細密な音色構図と敢えて曖昧なテクステュアが重ねられていき、大変特異な音場ながら説得力のある、邦楽器の未知なる空間を体験させてくれる。

五、雪舟讃Ⅰ　廣瀬量平作曲

1998年日本音楽集団第151回定期演奏会で初演された《雪舟讃Ⅰ》は、一人の作曲家に全権を委ねる〈コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズ〉第1回の委嘱作品として作曲された。廣瀬量平の邦楽器のための作品の第三十作目にあたる。その多種にわたる曲のなかで、一番大きなアイテムは尺八のために書かれた作品だが、他の邦楽器合奏曲でも尺八が主要なパートを占める。「よきにつけあしきにつけ、尺八の音は日本人の心の形をしている」と名言を発したこの作曲家。遥か二十五年まえの秀作《夢十夜》とならぶ68歳の作品《雪舟讃Ⅰ》もマルティプル編成＝笛／尺八Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ／琵琶／箏Ⅰ・Ⅱ／十七絃／打楽器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ（鑿・銅鑼・木鉦・鳴子・魚板など）で、尺八セクションと打楽器陣の部厚くパワフルな諸相がうかがえる。しかし三味線が省かれている。雪舟の室町時代には、まだ三味線が伝播していなかった。また、動物の皮を使った太鼓類を排除し、全四人が竹のアンクルンを併用する。こうして禅の思想、漂泊の西国各所、そして近世江戸邦楽の埒外にあるイメージを隠喩しつつ、無数の画像や風物が交錯して、ポリフォニクにかつヘテロフォニカルに鳴り響く。

室町時代の画僧の雪舟（1442-1506?）は、早くから画才をあらわしたが、中国に渡って大陸の大自然の風景から水墨画のリアリティを知得し、絵師としても禅僧としても高い評価と地位を認められて帰国。しかし居所の寺や庵は転々と変わり、京—周防—筑前—豊後—山陽—山陰—丹後…と漂泊を続けながら、日本の自然による独自の水墨画を描いた。後世二十世紀になってから1956年、世界平和評議会より世界文化貢献の巨匠として、レンブラント、モーツァルト、ハイネら十人のなかに選ばれた。当集団の創立メンバーであり、指揮者である田村拓男が、雪舟所縁の地、島根県益田の出身であることも、廣瀬量平が《雪舟讃Ⅰ》を書く強い動機となったらしい。

上野 晃プロフィール

1927年7月26日　大阪市生まれ。音楽評論家。
日本の作曲／日本音楽・芸能／吹奏楽などを専門分野にする。
「音楽の友」「バンドジャーナル」「邦楽の友」など、各誌に毎月演奏会批評その他を寄稿。
1970年代前期より90年代後期にわたる二十五年間、文化庁芸術祭執行委員、芸術選奨・音楽部門審査委員、芸術作品賞選考委員、日本芸術文化振興会・専門委員などを務める。
現在、日本打楽器協会・評議員、清元清栄会・評議員、国際現代琵琶楽会・顧問、日本近代音楽館・資料委員、東京文化会館運営委員、日本アルバン・ベルク協会・理事など。
音楽執筆者協議会、東京音楽ペンクラブに所属。

佐竹由美（さたけなおみ・ソプラノヴォーカリーゼ）プロフィール

東京芸術大学卒業。同大学院修了。現在同大学院博士課程在籍中。中村義春、嶺貞子、小林道夫、A.オジェーの各氏に師事。在学中、第31回芸大メサイアのソリストとしてデビュー。学部を首席で卒業し、皇居にて御前演奏の栄を授かる。第53回日本音楽コンクール第2位入賞（福沢賞も受賞）。また、ロータリー財団奨学生としてイタリアへ留学。ノバラ市国際音楽コンクール第2位、バッハ国際コンクール第4位（1位なし）。宗教曲から現代作品まで幅広いレパートリーをもって活躍中のソプラノ歌手である。透明感溢れる美声と洗練された歌唱は内外で高い評価を受けている。二期会会員。東京室内歌劇場会員。

日本音楽集団　最近の活動と今後のおもな予定

2002年
6月12日（水）山形東高校音楽鑑賞会
6月13日（木）蓼科ホームコンサート　エクシブ蓼科コンベンションホール
6月15日（土）雲雀丘学園小学校音楽鑑賞会　同校講堂
7月 6日（土）御坊「竹取物語」公演　御坊市民文化会館大ホール
7月 9日（火）青森高校・青森北高校芸術鑑賞教室　青森市文化会館
7月11日（木）南陽市公演　南陽市民会館
8月 3日（土）スーパー邦楽ライブⅣ「竹取物語」　福岡シンフォニーホール
8月 8日（木）文科省主催平成14年度伝統音楽研修会「古代舞曲によるパラフレーズ」演奏及びワークショップを担当　国立劇場（大）
8月22日（木）日本音楽集団の団員の作品を紹介する「夏のコンサート」　ティアラ江東小ホール
8月28日（水）～30日（金）佐久音楽鑑賞会
9月20日（金）第168回定期演奏会～クリティックス・プロジェクト・シリーズⅠ 上野晃—現代邦楽の領域Ⅰ—個と群のリレーション～　津田ホール
9月29日（日）二本松公演　二本松コンサートホール
10月 7日（月）青森県倉石村小中学校芸術鑑賞教室　倉石村コミュニティーセンターホール
10月 8日（火）八戸南高校芸術鑑賞教室　八戸市公会堂
10月10日（木）水海道高校音楽鑑賞会　水海道市民会館
10月18日（金）横浜市立西が岡小学校音楽鑑賞会
10月24日（木）鳥栖高校音楽鑑賞会　鳥栖市民文化会館
10月31日（木）山梨県立日川高校音楽鑑賞会
11月 2日（土）第169回定期演奏会～クリティックス・プロジェクト・シリーズⅠ 上野晃—現代邦楽の領域Ⅱ—保守と改革～　第一生命ホール
11月10日（日）第8回みえ県民文化祭　第33回三曲演奏会　津リージョンプラザ　お城ホール
11月12日（火）、13日（水）栗東公演（幼稚園、保育所）　栗東芸術文化会館さきら
11月14日（木）岩国学校音楽鑑賞コンサート　シンフォニア岩国
11月15日（金）パフォーマンス・フォーラム出演　エリザベト音楽大学
11月17日（日）にしいず町民文化の祭典　静岡県西伊豆町町民体育館
2003年
1月 5日（日）新春邦楽コンサート　ギャラクシティ西新井文化ホール
1月17日（金）おんがく工房その25「和楽器の調べ」練馬文化センター小ホール（つつじホール）
1月22日（水）第170回定期演奏会～新しい音を探るVol.1～　津田ホール
2月 1日（土）岩国公演　シンフォニア岩国
2月16日（日）邦楽レクチャー&コンサート　千葉市民文化ホール
3月 7日（金）新潟公演　新潟市音楽文化会館ホール
4月22日（火）麹町学園女子中学・高校音楽鑑賞会　東京芸術劇場
5月24日（土）第171回定期演奏会～長沢勝俊作品集～　第一生命ホール

賛助会員へのお誘い

1999年10月、特定非営利活動法人日本音楽集団が発足したのを契機に、賛助会員を募集しています。多くの方々からの支援を仰ぎ、息の長い活動を目指したく、ご協力お願い申し上げます。　募集の詳細はチラシをご参照ください。

賛助会員（五十音順）

法人・・・・・
(株)全音楽譜出版社
(株)宮本卯之助商店

個人・・・・・
青戸順子
青柳　堯
朝吹英世
安達眞五
新井克輔
飯塚絹子
飯吉正山
家永和治
逸見　護
伊藤美恵子
今村厚子
今村文彦
植木眞代
大木紀史
大関富枝
太田颯衣
川壁　正
岸　彰則
木津のぶ
小泉和子
後藤　隆
後藤陽子
桜田正憲
白水昭彦
佐々木浩二
杉田和繁
関　厚雄
田原たま
堤　紀江
手塚愛子
藤山雅弘
中島靖子
中島康子
野原清子
古川羽衣山
本田　実
水野正徳
森山俊雄
渡辺京子
渡辺ハル
渡辺治子

特定非営利活動法人
日本音楽集団
〒151-0073　東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302　TEL03-3378-4741 FAX03-3376-2033
ホームページURL http://www.promusica.or.jp/index.html　http://www.wahoo-net.com/promusica/　E-Mail office@promusica.or.jp

INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
ims
アイ・エム・エス
●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣
〒167-0043東京都杉並区上荻2-3-4 ゆうでんビル
PHONE.03-3397-2292
FAX.　03-3397-7728

箏
箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、
楽器の本質を追究した箏
十七絃箏
二十絃箏
二十五絃箏
Tokyo Kinkodo
時を超え心に残る音づくり
有限会社 琴光堂
〒152-0003東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL03(3792)8481　FAX03(3792)8437
E-mail：kinkodo@v004.vaio.ne.jp